

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	教育学	専攻
研究代表者 (2019年3月現在のもの を記入)	在籍課程・学年・学生番号			氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年			粕谷 圭佑 印	
指導教員	所属・職名			氏名	
	文学部・教授			北澤 毅 印	
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	社会
個人・共同の別	個人			・ 共同 名	
研究課題	「初期学校的社会化」過程に関する相互行為論的研究:幼稚園年少級での「園児集団」の達成に着目して				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名	
	文学研究科教育学専攻 博士課程後期課程2年			粕谷 圭佑	
研究期間	2018 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

学校に参入した子どもは、学校特有の生活様式や行動パターンを獲得することを通して「児童」となる(「学校的社会化」)。とりわけ、幼稚園に入園したばかりの子どもたちは、落ち着きがなく集団としてまとまりのない状態から、短期間の中で園児集団としてまとまっていくことが経験的に知られている。本研究の目的は、この「初期学校的社会化」過程でどのような相互行為が展開されているかを明らかにすることである。そのため幼稚園年少級を対象にしたフィールド調査を行い、エスメソドロジーの視点から検討する。本年度は、調査で得られたデータから、入園後数日間の子どもの変化に焦点化した分析と、幼稚園の活動において、ルーティン的に行われる活動に焦点化した分析を行った。また、「子どもの相互行為能力」に関する理論研究の展開可能性も示唆された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ エスノメソドロジー } { 社会化 } { 幼稚園 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 幼稚園年少級を対象にした調査の実施**

「席に座ってられない」「集団行動が取れない」「教師の話を聞けない」といった学校に馴染めない子どもの「逸脱」「問題」は、従来、「社会化(socialization)の失敗」として捉えられてきた。この実体論的な見方に対して、児童の問題状況は教師や社会が想定する「児童の望ましい状態」との差異に見いだされるという関係論的な見方がある。ここでは子どもがいかに児童らしい存在になるのかということが問いとなり、子どもが学校特有の生活様式や行動パターンを獲得する過程を解明することが必要とされる。この学校特有の過程を「学校的社会化」と呼ぶ。本研究の予備調査から明らかになったのは、教師からの全体指示に応答する・整列するといった「集団としてまとまった振る舞いをする」という点に関しては、就学前段階の幼稚園年長級でも、大多数の子どもが難なく行えるということであった。

このことから、幼児教育段階で身につける行動様式に学校的社会化の要素が十分含まれていることが見込める。また、調査対象園の園長からは入園時には落ち着きがなく、まとまらない年少級の子ども達が、入園後、比較的短期間の中で園児集団としてまとまっていくという語りも得られ、学校的社会化の初期段階を幼稚園年少級に観察できる可能性が示唆された。学校的社会化「されていない状態」から学校的社会化「された状態」への過程を捉えるためには、幼稚園入園段階から、子どもが幼稚園での集団的活動を行なえるようになるにあたって、どのような相互行為が展開されているかを分析する必要がある。また、「小1プロブレム」をはじめとする教育実践現場での困難が、子どもが学校に参入し始める段階に生起する以上、このいわば「初期学校的社会化」の過程を明らかにすることが早急に求められる。そこで本研究では、学校的な「集団としてのまとまり」が観察され始めるとされる幼稚園年少級の子どもらが、入園以降どのような過程を経て「園児集団」として組織されていくのか、という点を解明すべく調査と分析を行った。

2018年度は、関東圏内私立幼稚園で、年少級の参与観察および映像データの収集を行った。子どもの入園魔もない4月は入園式から開園日すべての訪問を行い、5月以降は月2~4回のペースで訪問・ビデオ撮影を行った。また、日々の子どもの変化について幼稚園教諭と情報共有をしながらのインタビュー調査も並行して実施した。本年度は、調査で得られたデータから、以下の分析と検討を行った。

2. 幼稚園入園後数日間の「変化」に着目した分析

幼稚園に入園した子どもたちは、さまざまな「学校的な振る舞いの規則」に出会う。とりわけ家庭(日常)場面と教育場面の相互行為形式の違いにさらされる。入園後まもない子どもたちと保育者とのやりとりには、なんらかの形でこの「新たな」相互行為の形式が教示される場面があるだろうし、子どもがこの振る舞いの規則を身につける過程があることが想定できる。

そこで、この「学校的振る舞いの規則の習得過程」に着目し、そこで、幼稚園年少級の「おあつまり」場面のうち、「おねむり」と呼ばれるパターンの活動に子どもがはじめて出会ってから数日間に着目して、どのような相互行為が組織されているのかを分析した。この分析では、子どもが新たな組織で「規則を習得する」ようにみえる過程がどのようなものであるのかに見通しを与えることを目指した。

この成果は第70回日本教育社会学会大会(佛教大学)において発表をおこなった(発表題目「学校的社会化の諸相(6)―幼稚園における「規則」と「一斉教授」に着目して」, 2018年9月4日)。本発表内容は修正ののち学術雑誌への投稿を予定している。

研究成果の概要 つづき

3. 学校的場面におけるルーティンの活動としての「出席確認」場面に着目した分析

幼稚園の「出席確認」場面に着目した分析を行った。小学校と幼稚園に共通してみられる活動の特徴として、朝の会や号令などのルーティン化した活動がある。とくに、幼稚園の「出席確認」は、実質的には出席を確認することが重要なのではなく、子どもたちをこの活動に参加させた形で日々繰り返し、園に「なじむ」ことのほうに重きが置かれている。そこで、ルーティン化を志向した出席確認場面が、どのような相互行為によって構成されているのかを検討した。分析対象として、3歳児級と1歳児級の「出席確認」場面を取り扱った。分析の結果導き出されたのは、「出席確認」という活動が、すくなくとも幼い子どもを相手にした場面においては、保育者によって様々なかたちで「基準の調整」という実践によって、子どもを場面に参加可能になっていること、さらに、それによってこの活動が日々繰り返し可能な形で組織化されている、ということであった。つまり、「出席確認」場面のルーティン化には、その基盤として「基準の調整」という実践がある、という観点がここから導かれた。本分析の成果は、粕谷圭佑, 2019, 「第2章 学校的場面のルーティン化を可能にする『基準の調整』—1歳児と3歳児の「出席確認」場面の分析を通して」平成30年度～平成34年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(課題番号18H0990, 研究代表者:北澤毅)として発表した。

4. 理論テーマとしての「子どもの相互行為能力」

上記2つの場面の分析を行う中で、大人と子どもの相互行為の中で、子どもが様々な形で合理的な相互行為実践を行っていることが観察できた。ここから「子どもの相互行為能力」をトピックにした理論的研究を発展させることの意義が見出された。相互行為的に有能力的な存在としての子どもという観点は、1970年代～80年代にかけて、教育場を対象としたエスノメソドロジー研究の中で論じられてきたものであるが、現在では同様の関心の研究はまとまった形では積み上げられてきていない。一方で、子どもを社会的な「未熟者」と捉えることに対するアンチテーゼは、イギリスで展開されている「新しい子ども研究」の文脈ではすでに定着している議論であり、これまでも歴史社会学や社会構築主義のアプローチで研究が積み重ねられている。こうした先行研究の状況を踏まえて、本研究の分析視点や問題関心を、「子どもの相互行為能力」をテーマにして適用していく方向性を検討中である。2018年度においては、先行研究の調査にとどまったが、今後学会発表をベースにした研究発表を予定している。

5. 子どもの「うそ」・「演技」についての検討

上記4の関心に導かれたものとして、子どもの「うそ」や「演技」を相互行為上の戦略として用いることについての試論的検討を行った。子どもの相互行為能力が教育場面では子どもがうそをついたり演技をすることは好ましくないものとして捉えられがちである。その一方、ゴフマンに代表される対面的相互行為の社会学では、社会を舞台と見立てて、「うそ」や「演技」を、日常生活を維持する技法として描いてきた。本研究では子どもの「うそ」や「演技」を、虚構の世界を作り上げることで創造的になる一つの方法として捉える見方を提案することを試みた。そのためにまず、子どもの「うそ」と「演技」の布置連関を再特定化し、子どもに特権的な「遊びのうそ」を検討した。次に、創造的な虚構の世界を方法的に生み出す演劇の技法を、平田オリザの演出論をてがかりにして検討した。こうした作業を通して、子どもの「うそ」と「演技」を再考し、自己の振る舞いを「演出」する技法の可能性を検討した。この研究成果は、粕谷圭佑, 2019, 「子どもの『うそ』と『演技』再考—自己の振る舞いを『演出』する技法の可能性」『立教大学教育学科研究年報』第62号, 2019年3月, pp. 193-203. として発表した。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

粕谷圭佑, 2019, 「子どもの『うそ』と『演技』再考—自己の振る舞いを『演出』する技法の可能性」『立教大学教育学科研究年報』第 62 号, 2019 年 3 月, pp. 193-203.

粕谷圭佑, 2019, 「学校安全対策としての地域連携の課題に関する基礎研究: 『川西市子どもの人権オンブズパーソン』の取り組みを手がかりにして」『神奈川大学 心理・教育研究論集』, 第 45 号, 2019 年 3 月, pp. 331-340.

②

該当なし

③

該当なし

④

小野奈生子・山田鋭生・粕谷圭佑, 2018, 「学校的社会化の諸相 (6) —幼稚園における「規則」と「一斉教授」に着目して」, 日本教育社会学会大会, 第 70 回大会 (佛教大学) 2018 年 9 月 4 日

粕谷圭佑, 2019, 「第 2 章 学校的場面のルーティン化を可能にする『基準の調整』—1 歳児と 3 歳児の「出席確認」場面の分析を通して」平成 30 年度～平成 34 年度科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書 (課題番号 18H0990, 研究代表者:北澤毅), 2018 年 4 月.

また、本研究を基にした研究申請により、研究代表者は日本学術振興会特別研究員 (DC2) に採択された。